

発達障害理解のための講演会開催

世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」では『発達障害理解のための講演会』を平成21年度の設立以来開催しています。今号では中面にて、渡辺久子氏（慶應義塾大学医学部小児科専任講師）による「子どもの発達障害を考える～発達障害のある子どもの育ちと子育てについて～」をテーマに開催された講演についてお伝えします。

子どもたちの育ちと心の安定 第2回

わかってもらえない不自由さ

発達障害の傾向があるお子さんは、しばしば自分の気持ちを人にうまく伝えることができず、自分をわかってもらうことの困難さを抱えています。

たとえば、課題を始めるにあたって、あるお子さんにボールペンを渡します。そのお子さんは書きながら「えんぴつけずれてない？ えんぴつけずれてない？」と繰り返します。「えんぴつで書きたかったの？」と聞くと初めて「えんぴつで書く」と自分の気持ちが表現できます。あるいは、おもちゃで遊んでいるところに他のお子さんが近づいてきておもちゃに手を出してくると、その場から離れて戸の開け閉めを始めるお子さんがいます。「これ～ちゃんが今遊んでいるから、触らないでね」と言ってあげて「～ちゃん、大丈夫だよ、遊べるよ」と言うと、戻ってくることができます。

このように、自分の要求をうまく伝えられなかったり、「いや」ということが言えなかったりします。お子さんの本当の気持ちをわかってあげて、代わりに表現してあげながら、その要求を満たしてあげることが大切です。そのことによってお子さんは、この人はわかってくれる、この人に向かって自分の気持ちを訴えていけばいいのだということを感じるでしょう。それが人とのつながりの第一歩になるのです。

（世田谷区発達障害相談・療育センター 相談・療育主幹 喜多 民子）

世田谷区発達障害 相談・療育センター って どんどころ？

世田谷区在住の発達障害のある方、またはその疑いのある方、その家族、関係者を対象としています。また、世田谷区の発達障害に対する支援を推進するための中核的な拠点施設として関係機関への支援や、広く区民の皆様にも、発達障害について理解してもらうための活動をしています。

シリーズ 教えて発達障害のこと

本人の立場から その3

「日常」を生活していく中で

このシリーズでは、社会生活における生きにくさを本人の立場からいえる、発達障害のある人にとって生活の安定、安心につながるための支援のあり方について考えていきたいと思います。

ー日常を過ごす中で、感じてほしいことはありますか？

Aさん(当事者) 人と接するときは緊張感や不安を感じることが多いです。相手の言動の意味がよくわからず、とまどってしまったり、他の人から自分がどう思われているかということや、自分が発言をしたら、相手からどう言われるかが気になり、落ち着かない気持ちになります。

S(支援者) Aさんの話にあるように、むしろ人に気を遣い、緊張して心身共に疲れやすいという人は多いですね。また、他人が思いもよらないところに不安や脅威を感じ、なかなか解消できないという人もいます。

このように本人の苦労が周囲の人に理解されないまま、「周りの空気が読めない」とか、「人の気持ちかわからない」と言われてしまつことが多いですよ。

ーBさんはいかがですか？

Bさん(当事者) 自分なりの決めごとや秩序があるのに、他人にはわかってもらえず、無視されたり、邪魔されることや、予定して

いたことが突然中止になったときなど、混乱して自分ですら生活していかなくなり、学校や職場では、そういうことがたくさん起きます。

ー随分と苦労されているんですね。

T(支援者) 突然の変更や変化に弱いということもよくいわれます。しかし一方で本人にとって見通しが持てたり、「こういうことをやれば出来るんだ」という体験があることで確実にそれが積み重なると、自信を持ったり、安心して能力を発揮することができる人々たちであると思います。

実際に、本人の気持ちの安定、安心できると、その人の振舞や人との関わり方が変わってくることを実感しています。

基本は、安心出来る人の存在や、居場所があることだと思います。環境の中で、本人の持っているものが発揮でき、ゆっくりであっても着実に修得することで成長し、自主性を持って生きていけるようになっていくことが大切だと思います。

（げんきスタッフによる座談会から再構成しました。）

世田谷区発達障害相談・療育センター

開所日時

月～土曜日（祝日及び年末年始を除く）
午前9時～午後6時

利用方法

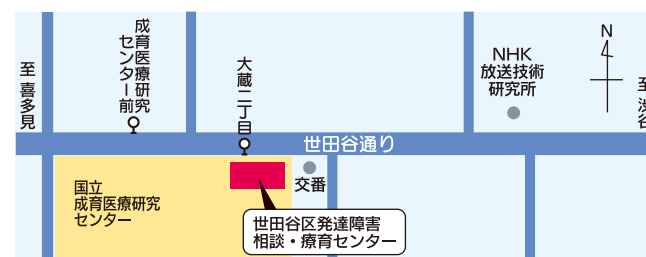
利用は予約制です。利用を希望される方は、直接『世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」』へお電話にてお申し込みください。

〒157-0074 世田谷区大蔵 2-10-18
大蔵二丁目複合型子ども支援センター 2・3階
TEL 03-5727-2235（代表）
03-5727-2236（相談専用）
FAX 03-5727-2238
URL <http://www.ryo-iku.jp>

編集後記

渡辺久子先生の講演会は、ほとんど空席がないほどの大盛況で皆様の発達障害と子育てへの関心の深まりを感じました。渡辺先生は幼児期に診られたお子さんのその後も長年にわたり見守っていらっしゃいます。今は成長したお子さんたちが、今度は子どもたちを見守る立場となって、会場にも来てくださり、先生も再会を喜んでいらっしゃいました。生涯を通じての支援は私たちにとっても大きな課題です。

アクセス



「成育医療研究センター前」「大蔵二丁目」バス停下車すぐ

- 東急バス・小田急バス
渋 24 成城学園前駅 ↔ 渋谷駅
- 東急バス
都立 01 成城学園前駅 ↔ 都立大学駅北口
等 12 成城学園前駅 ↔ 等々力操車所
用 06 成城学園前駅 ↔ 用賀駅
- 小田急バス
渋 26 調布駅南口 ↔ 渋谷駅
- 東急コーチ
玉 31・32 二子玉川駅 ↔ 成育医療研究センター

※駐車場はありません。

業務受託 社会福祉法人 嬉泉

〒156-0055 世田谷区船橋 1-30-9
TEL 03-3426-2323 FAX 03-3706-7242
URL <http://www.kisenfukushi.com>

発達障害を考える

慶應義塾大学
医学部小児科専門講師
渡辺 久子氏

——発達障害のある子どもの育ちと子育てについて——

当センターでは、発達障害理解のための講演会を平成21年度より開催しています。今回は、小児精神科医として長く乳幼児精神保健に携わっていらっしゃる渡辺久子氏をお招きし、講演をして頂きました。当日は大勢の参加者で、会場も熱気にあふれました。紙面の関係でその一部となりますが、お話の内容をご紹介します。

講師紹介

(社福)嬉泉常務理事 石井 哲夫

渡辺久子先生は、慶應義塾大学医学部小児科専門講師として、学生の教育にあたり、併せて、慶應義塾大学病院小児科外来医長として診療を実践されています。

現在まで、国内外の様々な学会、あるいはその団体の責任を持たれて幅広い社会活動をされています。平成20年8月には、横浜でアジア初の、第11回世界乳幼児精神保健学会世界大会が行われ、日本組織委員会会長を務められました。

また、世田谷区発達障害相談・療育センターを運営する、社会福祉法人嬉泉の活動にも長らくご協力頂き、また大変深くご理解を頂いております。そのような中で、今回の「げんき」の発達障害理解のための啓発事業にもご協力を頂きました。

いく。そして、そこで良い人達に出会って良い顔で帰ってきます。彼はすぐ世界が広い。こういう幸せな気持ち、幸せな思いをカイロスと言います。そしてこれが心をつくるんです。

ギリシア語では時間に二種類の概念があります。一つは今が何年の何月何日の何時という皆で共有し、生活、社会を作っていく上で必要なクロノスの時間。共有できて効率が良く、そして今や世界中で一緒の時



間ね。もう一つの時間、カイロスはその人だけの時間。その人が全身全霊で輝く、1分2分では測れない永遠の時間です。診察を続けて39年になりますが、競争主義、効率主義、そういうものが徘徊して日本を壊していったと感じています。私はよく海外で、日本文化の中には4つのSがあると話します。簡素「シンプル」、ささやか「スモール」、物静か「サイレント」。それから、ゆっくり「スロー」です。これはまた命の本質を表します。本当に命の営みは、気が遠くなるような営みです。日本には育てにくい、育ちにくい仲間がいるときの包み方が本来あった。今の日本はちょっとでもダメだったらダメという厳しさがある。

でもやっぱり、私は自分の故郷の日本をA君の言う空氣の「気持ちの良い」、空氣が「柔らかい」場所にしたいと思うんですね。世田谷区は是非目指して下さい。発達障害のお子さんや、重度心身症のお子さんが、

カイロスの時間が心をつくる

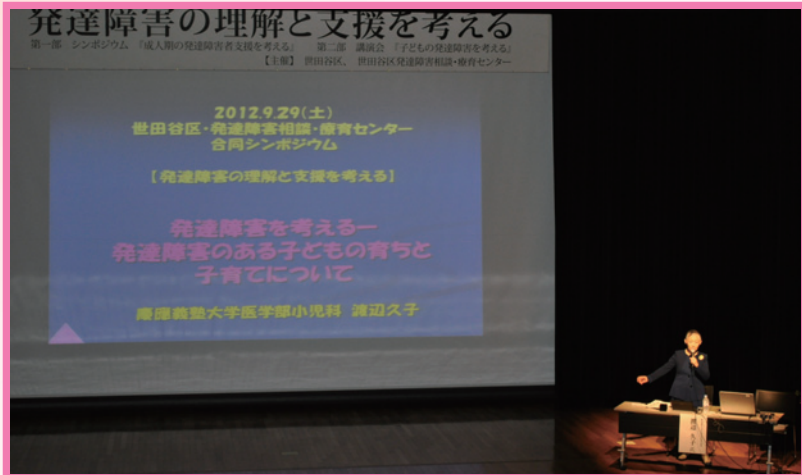
アスペルガー症候群のA君は、海外旅行の度に私に絵ハガキをくれます。それは30年以上前、彼が大変な思いをしていたとき、私が真心想めて「大丈夫ですか」って言ったことが彼の心の忘れえぬ瞬間となり、私を彼の「良い人」リストの中に入れてくれたからですね。

A君は仕事をしていて、「ボーナスの使い方がわからない」って言うので、「旅行したら？ 外国は空氣が違つよ」とすすめました。そうしたら「先生、本当に空氣が違つ、本当に気持ちが良い。日本の外に行く」と本当に楽しんだ。帰ってきました。彼の大好きな世界は電車であり、かつ良い人間のコレクション。その二つを組み合わせた世界を彼は旅して

へにっこり笑える社会は、私達全ての人間にとって良い社会です。この子達はカナリヤ、社会に毒つ氣があるとピーピーと教えてくれます。

普通の自分、普通の感覚の大切さ

子どもは、大体3歳くらいまでの時期の身体記憶がどう貯まるかで発達が決まってしまうということがあるんですね。後輩の小児科医が福島県郡山市では絶対に震災後のトラウマの子どもは出したくないというので「今この当事者であるあなた達が一番得意ですぐ出来ることをやれ



ば良いのよ。ところでこの地域は子どもを喜ばせるのに何が得意なの？」って言ったら、「絵本」だ。外部の人の言うことを聞くのではなく、自分たちの地域にあったやり方で子どもに普通の自分、普通の感覚を取り戻すことが大事なのです。絵本の読み聞かせが始まり、そして子どもとお母さんが安心して過ごせる場所ができました。なぜ、こういうことをお話しするかというと、子どもはいつ何時何に出会うかわからない。その時に羊水のうちに守られる場所があるか、その配慮を一番先にしてもらえるかどうかで体験が育ちの肥やしになるか、壊すものになるかの明暗が分かれるからなんです。

良い抱き癖は、脳の発達を促す

赤ちゃんの脳みそはお豆腐のように柔らかくて、髄液の中に浮かんでいて、さらに頭蓋骨、そしてさらに羊水に包まれ、子宮の壁に包まれています。また社会が妊婦さんだと守っていく。つまり赤ちゃんの命は何重にも守られ、抱き癖が付いて生まれてくるわけです。この良い抱き癖は、何を促すかという、脳の発達を促しているんですね。

私は羊水を母性、子宮を父性だと思っています。そして日本ほど、

羊水のような柔らかさで包む

間主観性のお話をしましょう。実は赤ちゃんの脳には相手の心の奥、相手の意図を見抜く力がある。一方で、お母さんの声は赤ちゃんの脳を自然に刺激するように出来ている。お母さんの「おはよう」に、阿吽の呼吸で響き合ってお互いの脳が発達していきます。

しかし、間主観性の発達不全がある広汎性発達障害の子どもは、そういうやりとりどころがすごく難しく、頑張ってもうまくいかなくて本当に疲れ果ててしまいます。厳密にはいろいろな要因が重なっている可能性もありますが、エネルギーを使い果たして二次的な障害を起こすと、育ちがだんだん逸れていってしまつ。だから、時間を充分にかけ、そしてしっかりと暖かく包むことが必要なのです。羊水のような柔らかさ、それからこの範囲でやれば大丈夫という子宮のような枠組みでやっていけ

ば、必ずどんな子どもでも伸びていきます。傷つきながらも子どもたちは乗り越えます。そして辛い事があった後にはねぎらう。辛い事があっても丸があれば良いんです。

チームワークで親を支える

現在の研究では、子どもが感じる「良い人」というのは血のつながりとも、男女、年齢とも関係ないんです。「良い人」が、親よりも保育園の先生という場合もあるでしょう。でも、子どもを一生見ていけるのはお父さんとお母さんでしょ。だから、周囲が気を付けて、「私達はこんなふうにするけれども、それはお父さんとお母さんと一緒にやっているんだよ」とチームであることを伝えていくことが大事です。そこには保育園とか地域とかも絶対に必要ですね。今、特に若い真面目なお母さん達が、周りに応援してもらえない環境がなくプレッシャーを感じています。「羊水の加減」で、いいのいいの、それでいいの、大丈夫大丈夫っていうのが、一番良い応援なんです。

発達障害の子が何を感じているかを考えながら、その子が社会で尊重され、その子らしく生きるために、本当に良い出会いのカイロスを日々心がける。それがとても大切だと思います。(終)

(文責:世田谷区発達障害相談・療育センター)